

令和2年度版

**第1層生活支援
コーディネーター
活動事例集**

**社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会
横浜市健康福祉局**

はじめに

1 事例集の作成にあたって

横浜市では、生活支援CoがCPに第2層、区社協に第1層として配置され、この5年間で多くの活動や協議の場が生まれました。しかし今年度、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、地域活動は停滞しお互いの顔が見えない状況が続いています。社会的孤立の拡がりを不安視する声が多く聞かれる中、生活支援Coは関係機関や地域とともに、この状況下だからこそできることは何か、丁寧な話し合いを重ねていきました。そこで生み出された新たな仕組みや方法にチャレンジし続ける中で、改めて「つながりから得られる喜びや安心感」が心豊かな生活を支えるためにいかに大切な、再認識する特別な1年となりました。

変わりゆく日常の中でもお互いが気かけあえる地域社会の構築に向けて、奮闘する1層Coの取組を掲載しています。今後、多くの方にご覧いただけると幸いです。

2 掲載事例について

本事例集では、各区の様々な取組の中から特徴的な事例及び市域の取組を6つ取り上げ、後半ではエピソードとして8つの取組を掲載しています。また、取組を「プロセス」と「階層」の2つの視点で整理しました。

(1) プロセスによる分類

本事業は、「交流・居場所」「生活支援」「見守り・つながり」を取組の柱としつつ、住民主体をベースとした「地域づくり」のプロセスを踏まえて実践が行われているかを重要と考えました。そこで下記のとおり地域づくりのプロセス(A～C)に沿って、整理しました。

A 専門職による地域アセスメント

専門職や区社協の機能を生かして地域や施設の情報等をアセスメントし、課題解決方法を検討する段階。

B 目指す地域像の一致

地域の情報を基に支援方針を立て、どのような地域を目指していくかを地域住民等と共有していく段階。

C 課題解決に向けた支援

課題解決に向けて、情報発信や必要なネットワークの構築、具体的な取組を実施していく段階。

(2) 階層による分類

CP（又は特養包括）圏域を2層、区域を1層としながら、1層Coの取組が複数区や複数エリアに渡って広がってきたため、下記のように整理しました。

0.5層域の取組

近隣の複数区で区境の生活圈や民間企業の商圈などを意識した、効果的な課題解決の仕組みづくり。

1層域の取組

①区域における、担い手の発掘、課題解決に必要な情報発信、助成金制度の整備等による支援。

②広域に活動する団体（社会福祉法人、民間企業等）のネットワーク等による取組。

1.5層域の取組

複数のCP圏域に渡る共通課題の解決に向けた、2層Coと連携した働きかけや仕組みづくりの支援。

2層域の取組支援

2層Coと連携した、地区社協や自治会への働きかけによる地域づくりの支援。

※横浜市域を範囲に取り組んでいる「0層域の取組」も掲載しています。

目 次

はじめに

事例紹介

事例1	港南区	コロナ禍でも大活躍！あって安心「まちの給水所」	1層域	1
事例2	戸塚区	コロナ禍における移動販売の取組から、その先へ	2層域	3
事例3	中・磯子・栄区	3区で行う2層域から0.5層域までの協議体の展開	0.5層域	5
事例4	緑区	誰でも気軽に立ち寄れる「お散歩カフェ」	1層域	7
事例5	神奈川区	「地域状況把握シート」で地域の“今”を知ろう！	1層域	9
事例6	横浜市	1層Co連絡会を活用した課題解決やスキルアップに向けて	0層域	11

エピソード

鶴見区 ：今後に向けたオンライン活用の取組	13
西 区 ：身近な地域の取組紹介を通じた体制整備事業の啓発	13
南 区 ：コロナ禍の今こそ、地域に寄り添う生活支援Coの役割とは!?	14
保土ヶ谷・旭・泉・瀬谷区	
：団地・集合住宅支援から考える住民のエンパワメント	14
金沢区 ：SNSを活用した地域の情報発信の促進	15
港北区 ：Withコロナでのセカンドライフ講演会	15
都筑区 ：地域活動情報のWeb公開とCMとの交流会	16
青葉区 ：お互いが見える、話せる、だから一緒に取り組める！	16

略字表記

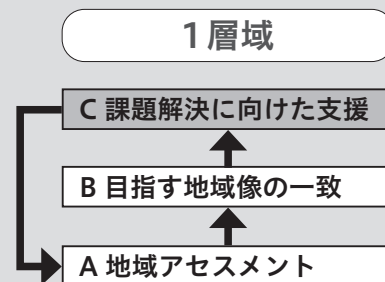
※この冊子では、次の用語については（ ）内の表示とします。

- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| ・地区社会福祉協議会（地区社協） | ・地域ケアプラザ（CP） |
| ・区社会福祉協議会（区社協） | ・地域包括支援センター（包括） |
| ・市社会福祉協議会（市社協） | ・特別養護老人ホーム併設地域包括支援センター（特養包括） |
| ・民生委員・児童委員（民生委員） | ・地域活動交流コーディネーター（地域交流Co） |
| ・地区民生委員児童委員協議会（地区民児協） | ・生活支援コーディネーター（生活支援Co） |
| ・地区連合町内会（地区連合） | ・第1層生活支援コーディネーター（1層Co） |
| ・自治会町内会（自治会） | ・第2層生活支援コーディネーター（2層Co） |
| ・ケアマネジャー（CM） | ・生活支援体制整備事業（体制整備事業） |

コロナ禍でも大活躍！ あって安心 「まちの給水所」

～新しい生活様式下でも継続した取組へ～

地域住民と多様な機関が参加する話し合いの場から生まれた『まちの給水所』。一つの地区から始まり区域に広がる取組として、飲料水や一時休息所の提供にとどまらず、介護予防や社会参加を目的とした体制整備事業の一翼を担っています。



港南区社協
山川 英里

取組のきっかけ

3つのCPが関わっている永谷地区は、以前より定期的で開催している住民主体の「地域支えあいネットワーク（以下、支ネット）」の場で、住民や多様な機関が参加する意見交換を行っています。更に、平成30年度には地区内に多数点在する福祉施設とつながりたいという住民の声を出発点とした「福祉施設連絡会」が、地区社協を中心に立ち上がりました。この連絡会をきっかけに地域と福祉施設が思いを共有し「顔の見える関係」が構築され、地域で行われている様々な話し合いの場に福祉施設が参画するようになりました。その結果、住民、学校、企業、福祉施設、事業所等の相互理解が深まり、つながりが強化されたことで、お互いの思いやメリットを生かした様々な取組や活動が生まれました。

『まちの給水所』の取組もその一つです。支ネットの場でも出された「暑い時の外出は熱中症が心配」「子どもや高齢者の脱水が気になる」「外出した時に休める場所があったらいいな」という住民の声や「業務的に外へ出る事業への協力は難しい」「場所や水の提供はできる」「施設入所者も地域で活躍したいと思っている」という福祉施設の声と、これまでの地域課題等をマッチングさせそれぞれの思いを「かたち」にするために、地域（住民・福祉施設等）、CP、区社協、区役所が連携し協議・検討

を始めました。

永谷地区では、CPが中心となり施設周辺エリアの地域関係者に呼びかけ検討会を立ち上げました。2層Coが地域だけではなく包括とも連携し、地域での事業展開を進めていきました。周知用ポスターの作成も福祉施設へ依頼する等、主体的に関わってもらおうよう働きかけ、チラシも自治会掲示板等への掲示だけではなく近隣小中学校へ全生徒数配布する等積極的に周知を行いました。

1層Coの思い／

「まちの給水所」は飲料水や一時休息所の提供による熱中症対策にとどまりません。外出機会の創出や気候の変化にとらわれず安心して外出できる環境の整備は「介護予防・認知症予防」につながります。専門職のいる福祉施設とつながることは、身近な場所にいつでも相談できる相手が増えます。

また、施設としては、入所している高齢者が来訪者対応等の役割を担うことで社会参加できるだけでなく、地域住民と接する機会を多く持つことができます。そしてこれまでのような施設同士だけにとどまらず、施設と一人ひとりの住民がつながれる可能性が期待できます。

Comment

多くの住民の皆さんが『まちの給水所』を利用してくださいました。これからも「地域」という顔の见えないものではなく「地域に住む一人ひとりの皆さん」に根差した開かれた施設として、スタッフ一同様々な事に挑戦していきたいと考えています。

看護小規模多機能型居宅介護クロスハート港南・横浜
前施設長 林田 堯之 氏

Comment

施設として大きな負担もなく、子どもからお年寄りまでこの事業を通してつながりが増えています。今年はコロナ対策を徹底しながら、自動販売機で水と氷を提供できるよう企業に協力いただき実施しています。施設にとって非常に有難くあった企画です。

特別養護老人ホーム日野サザンポート
施設長 小林 央 氏

取組の内容

1層Coは区社協のネットワークと1層協議体で培った福祉施設との関係性を生かし、区社協合同施設分科会を主体に区域展開を始めました。地域で進めるCPと区域ですすめる1層Coがそれぞれ役割をもって連携し取り組んだ結果、迅速かつ効率的に事業展開ができ、支ネットでの話し合いから2週間程度で事業実施となりました。区役所にも協力を依頼、物品の提供（ジャグ、紙コップ）を受けました。令和元年度は12か所の福祉施設・企業が趣旨に賛同。ある高齢施設では3,600杯の飲料を提供する等、子どもから高齢者まで多くの住民が利用しました。住民が福祉施設等とつながったことで、子どもにとっても、家庭・学校以外でいつでも安心して行ける場ができました。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、実施検討時に地域や施設、関係機関とともに目的を再確認しました。「住民一人ひとりの健康を維持するため、日常生活（買い物・通院・行政手続き等）を行うための外出は避けられない」「マスクの着用や運動不足で熱中症のリスクが例年以上に高まっている中で、安心して外出できる環境整備は必要」とのことから、「熱中症予防」と「新しい生活様式」を両立させて実施することとしました。

令和2年度の実施前には地域と団体・施設等にヒアリングを行い、新たに次の対応を追加しました。

- ・事業実施要領に感染拡大防止対策項目を追加
- ・利用4箇条のポスター2種類を作成（福祉施設作成）
- ・実施時間帯を施設等の状況に合わせ任意に設定
- ・物品提供に消毒液を追加

その結果、昨年度からの継続3施設・団体に加え、保育所や障害活動ホーム等、新たに4つの福祉施設が協理事業者となりました。実施に際しては災害時用備蓄ペットボトルで提供したり、パラソル下に椅子を置いた一時休息所を屋外に設置する等、施設毎に工夫をして設置しました。



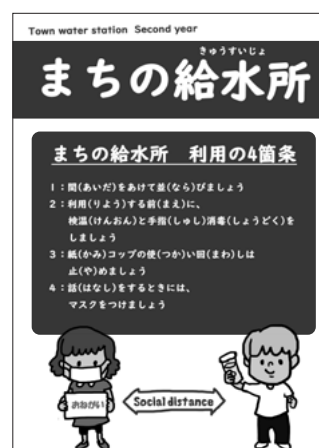
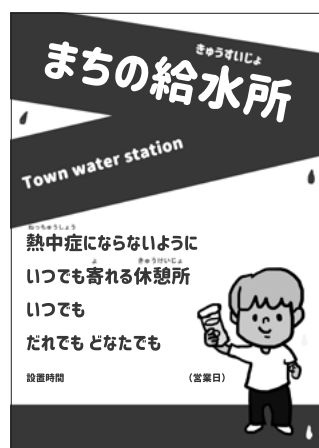
コロナ禍において工夫を凝らした設置の様子



1層Coの思い

住民の生活（行動）圏域は地域にとどまらないため、1層Coとして区域で展開した方が効果的と判断し様々な機関とすぐに連絡・調整に入りました。多様な機関が参画した地域づくりは、住民の思いだけを押し付けては上手くいきません。協力が必要な福祉施設とは、仲間として認めあい支えあう「相棒」として関係性を築いていたからこそ、協働して事業を円滑に進めることができました。

一方で、この事業は、「まちの給水所」の実施場所へ行くことが目的ではなく、外出時にいつでも飲料水や休息所の提供を受けられるという「心の保険」としての役割が大きいと、実際の利用者数で効果を測定することが難しく、事業評価の面で課題が残りました。



(左) まちの給水所ポスター（令和2年度 区域版）
(右) 利用4箇条ポスター（コロナ禍において作成）

今後に向けて

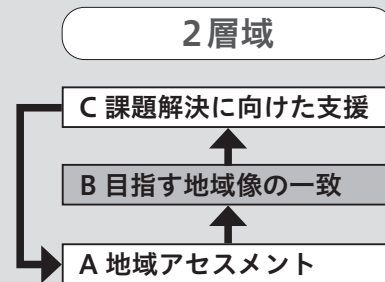
『まちの給水所』を展開することは、多様な主体と連携・協力しながら、住民とともに様々な介護予防や社会参加の機会を創出していく生活支援Coにとって大きな意味があります。

この事業は今年度の区運営方針（区の主要な計画）にも記載され、区全体としても重点項目として取り組んでいます。来年度は、区役所を中心に新事業として『まちの給水所』と移動販売拠点を活用した「まちの縁側（ベンチの設置）」へと拡充していく予定です。

コロナ禍における 移動販売の取組から、 その先へ

～移動販売から始まる。集いの場作り、協議体の開催～

戸塚区では、令和元年12月からコンビニと協力した移動販売が開始していますが、コロナ禍で外出を控える方が多くなり、販売エリアを拡大することになりました。この取組をきっかけに、サロンや協議体など様々な事業が展開されました。



戸塚区社協
右馬 彩子

取組のきっかけ

平成29年、ある地区を担当する2層Coが参加したコンビニエンスストア（以下、コンビニ）主催の住民意見交換会の場で、住民から「戸塚は、山坂が多い。高齢者の中には、スーパーまでバスを乗り継いで行っている人もいる。移動販売の必要性を感じる」と課題提起がありました。また、そのコンビニ店長が参加した地域ケア会議の場で、民生委員から「買い物に困っている人」がいることを聞き、店長はコンビニとして地域貢献（移動販売）ができないか検討していました。その後、CP、区社協の三者で協議をし、会場探し、地域への説明など数か月の時間をかけ、令和元年12月に区内4か所で移動販売の取組を始めました。

【緊急事態宣言発令中】

令和2年4月緊急事態宣言発令後、各CPから「コロナ禍で買い物に困っている人が増えてきている」との声を受け、4月下旬に移動販売エリアの拡大をコンビニに相談したところ、即日対応可能との返事がありました。1層Coから2層Coに打診したところ4エリアから申し出があり、コンビニ、地域、CP、区社協4者で各エリアごとの調整が始まりました。地域住民と対面での意見交換の場を設けることができなかったため、電話でのやりとりを行い、5月上旬から、毎週1回、1か所20分程度、まずは緊急事態宣言が解除されるまでを期限として移動販売がスタートしました。町内会は班回覧を自粛していたので、会場周辺の掲示板への掲示、ポスティングなどを中心に周知を行いました。

1層Coの思い／

今回の取組は、コロナ禍ということもあり、2層Coと会えない中でこまめに電話で連絡を取り合い、とにかく会話を続けることを大切にしました。企業と地域との時間軸の違いを感じ難い調整も多々ありましたが、地域のニーズに答えるため、2層Coと具体的なイメージをお互いに共有できるように意識して会話を心がけました。また、販売実績などの理由で2エリアでの移動販売の撤退が決まった時には、該当エリアの2層Coのモチベーションが下がらないよう、この取組から学んだことを生かして前に進めるように、働きかけを忘れないようにしました。



(上)
民家の庭先での移動販売（舞岡柏尾CP）



(左)
重い荷物は、スタッフが一緒に運んでくれます（舞岡柏尾CP）

取組の内容

2層Coと地域への働きかけ方などを詳細に相談しながら、各エリアでの取組を進めました。

①移動販売＋青空サロンへ（舞岡柏尾CP）

2層Coが民生委員と調整し、民家の駐車場を移動販売会場にしました。ここは住民の誰もが知っている場所なので、気兼ねなく立ち寄ることができる場所です。現在では、販売開始時間前に民家の軒先に用意された椅子に座りながら、おしゃべりに花を咲かせ、移動販売＋青空サロンが実施されています。

Comment



販売開始に向け、民生委員が会場探しや時間調整、周知など積極的に動いてくれました。買い物に助かるだけでなく、コロナ禍において住民同士がお互いに声をかけあえる場ができて良かったです。

舞岡柏尾CP 2層Co 高橋 由美子 氏

②移動販売の取組から協議体の開催へ（東戸塚CP）

2層Coから、以前より買い物支援について相談のあった町内会会長に移動販売の話をしたところ、エリア内の福祉施設の駐車場を会場にして5月GW明けに販売が始まりました。しかし住民への周知や販売実績などが課題となり、やむなく6月上旬に中止となりました。このままでは終わらせられないという2層Coの強い思いのもと、一連の流れをふり返るために、地区連合、地区社協、地区民児協などの関係者と話し合いを始めることになりました。すると「本当に高齢者が困っていることは何なのか」「買い物だけが困りごとのなのか」「買い物に困っている人がいる場所だったのか」など、地域に対する関係者の思いが溢れました。このエリアでは、今まで地域課題について話し合いをする機会がありませんでしたが、2層Coは地域の中のニーズを住民と一緒に解決するために継続的な意見交換の場を設けようと、関係者とともに協議体の設置を行うことになりました。

Comment



以前から移動や買い物困難の課題があがっていましたが、地域の主要メンバーが顔を揃えて話をする機会が無かったため、移動販売は良いきっかけとなりました。地域の声に耳を傾け、これからも住民と一緒に取り組んでいきたいと思います。

東戸塚CP 2層Co 岩崎 理恵 氏

1層Coの思い

1層Coとしてコーディネートに携わる中で大切にしている事は、「鳥（ミクロ視点）、虫（マクロ視点）、魚（流れを読む）」3つの視点です。ひとりひとりのお困りごとや住民の声を捉え、時には生活圏域や自治会単位で、時には区域で考えることを意識しています。今起こっていることの課題解決だけではなく、5歩先10歩先を見据えた視点の発想を心がけることで、2層Coや関係者の気づきにつながればと考えています。「買い物に困っている人がいる」、その一言から始まった移動販売の取組が、今では様々な活動に展開され、まちづくりの一役を担っています。



協議体の開催（東戸塚CP）

今後に向けて

移動販売がきっかけとなり、様々な形に発展していきました。舞岡柏尾CPは現在、移動販売と別日に野菜市が始まっています。そこには移動販売では見かけない子育て世代など若年層も来ていて、次の展開へのヒントになりそうです。東戸塚CPは、協議体で発案された「買い物・移動支援に関する住民アンケート調査」を行い、集計をして今後の取組につなげていく予定です。参加者の意識に変化が出てきて、それぞれが「こうしたらどうだろう」といった気づきの場になり、積極的な話し合いにつながっています。生活支援Coの役割は、買い物に困っている人の課題解決だけではなく、この取組を通して、地域の中でのつながりづくりや、課題解決のための話し合いの場作りなど多様に展開しています。これからも「誰もが安心して心豊かに暮らすことのできる地域社会の実現」を目指し、まちづくりを進めていきます。

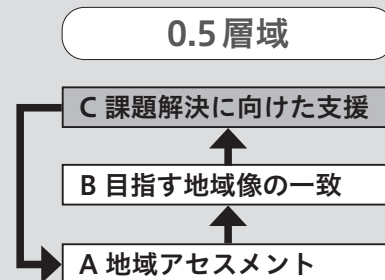
3区で行う 2層域から0.5層域までの 協議体の展開

～移動手段から高齢者の生活を支えるために～

高齢者等の外出機会の創出を目的に、3区と神奈川県タクシー協会（以下、県タクシー協会）とで取組の方向性を協議（0.5層協議体）し、各区で具体的な取組の検討を行っています（2層～1層協議体）。



中区社協 米本 美穂(右)
磯子区社協 岩間 真之(中)
栄区社協 若尾 ちづる(左)



取組のきっかけ

高齢者の5つの生活ニーズ（安心・日常的家事・外出・交流・非日常的家事）※は、横浜市内各地域によって多少の違いはありますが、1区だけでは解決しづらい、広域的な課題も多く存在します。これらの課題に対して、区域に縛られず広域的な連携による強み（既に獲得しているスキルや社会資源）の共有と活用によって、対応力を高めることができると考えました。

今回、主にJR根岸線沿線を生活圏とする3区において、各区の課題を抽出し共通のテーマとして取り組む内容を検討した結果、「移動手段の確保」について考えていくことにしました。

高齢者の外出手段・機会の確保をすることは、生活の質を高めるだけでなく、交流の機会（孤立予防）を絶やさないようにすることにも繋がります。3区合同で取り組むにあたり、住民主体の地域活動によって解決するだけでなく、輸送サービスを行っている企業と連携するなど、重層的に移動手段の選択肢を増やすことを目指すことにしました。

高齢者の移動を考える上で重視したのは『ドアtoドア』です。タクシーはそれを提供できる輸送サービスであることから、県タクシー協会を訪問して話を伺い、連携の可能性を探りました。その結果、互いの実情についてより深く情報共有することで高齢者の移動手段確保に繋がる連携が図れると確信し、以降話し合いの場を「協議体」と位置付けて取組を進めることになりました。

※出典 厚生労働省「安心生活創造事業成果報告書（平成24年8月）」から

< 3区合同による主な動き >

- ・令和元年7月：3区合同連絡会を開催。以降、課題抽出、テーマ設定、協議体開催に向けて等の話し合い。
- ・令和元年12月：県タクシー協会訪問。
- ・令和2年1月：第1回3区合同協議体を開催。以降、8月、11月と計3回開催。
- ・上記以外に、各区でタクシー会社への訪問や、協議体開催に向けた打ち合わせを実施。

＼1層Coの思い／

輸送サービスの専門職集団である県タクシー協会との連携にあたって大切にしたいことは、福祉が抱える移動の課題を解決するために一緒に考えてもらいたいという思いでした。そのためには協会側のメリット（配車アプリの普及など）も一緒に考え、双方にとって望ましい連携の形を模索しました。県タクシー協会がこれまで築いた取組の歴史に、福祉分野の個別ケースや地域との繋がりをプラスすることで、移動に対する課題のひとつの解決策が見つかるのではないかと考えています。



3区合同協議体の様子（11月）

取組の内容

3区合同協議体は計3回実施しました。第1回は、まずは双方の業界について情報共有をする機会とし、県タクシー協会からは協会の取組や制度を、3区からは高齢者等の移動困難事例や取組を報告しました。そこで分かったことは、県タクシー協会も独自に生活に密着したサービスを開発・提供していることでした。

第2回は、前回得た情報をヒントに3区が考えた連携の方向性に対し、県タクシー協会から意見をもらう機会としました。ここではタクシーの既存サービスを上手に利用することで、3区が思い描く移動支援に近い形のサービス提供が可能であることが分かってきました。

第3回は、具体的な次の3つの活動について県タクシー協会と3区で協力して取り組むことになり現在企画進行中です。

①配車アプリの推進

移動に困難を抱える方等が手軽に移動手段を確保でき、外出機会を増やすことを目的に、配車アプリを紹介する講座を開催する。

- ・タクシー利用を考える講座（磯子区）

②予約制の活用

タクシーを身近に感じ日常的に利用してもらうため、お出掛けイベント等を企画して実際に利用することや活用方法を工夫して利用者の負担軽減を図る。

- ・タクシーでちょっとお出掛け！企画（中区）
- ・乗り合いタクシーでGo！（栄区）

③ドライバー等による見守り

タクシー関係者版の見守りチェックシートを作成し、業務中に感じた利用客や住民等の異変を速やかに関係機関へ連絡できる体制を構築する。

- ・「ドライバーさん気づきポイント」パンフレット作成（栄区）



タクシーでちょっとお出掛け！企画

1層Coの思い／

県タクシー協会と連携するにあたっては、単に移動手段を確保することだけに主眼がいかないように、外出機会が増えることで生活の質が向上するためには何が必要かを何度も振り返りながら協議を重ねました。協議体では私たちが思い描く支援（サービス）が、実はすでに存在していた等の新たな発見もあり、他業種との情報交換はそれだけでも十分に有意義だと感じました。

Comment



「移動手段から高齢者の生活を支えるために」の協議に県タクシー協会にお声がけをいただき、誠にありがとうございます。タクシーは唯一『ドアtoドア』の公共交通機関であり高齢化社会において大変便利な乗り物であると思います。タクシー業界では、輸送の安全を前提に利用者利便向上のためスマホアプリによる配車システムの導入をはじめ、様々な取組を推進しています。こうした取組をご活用頂きながら高齢者にとってより良い輸送サービスの提供に繋がることを心より期待しています。

（一社）神奈川県タクシー協会 専務理事 三上 弘良 氏

今後に向けて

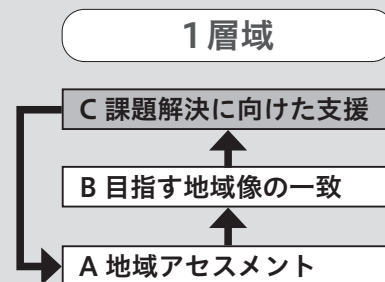
身近な移動手段としてサロンや買い物、通院などにタクシーを活用することで、外出のしにくさを感じている方への外出機会を増やすことが可能となります。また、タクシーの日常的な利用により、ドライバーが地域の方の顔を覚え変化に気付く「地域タクシー」として、緩やかな見守りの目が地域に増えることにもつながります。さらに福祉の専門職等と連携することで、強固な見守り体制作りの実現が期待できます。タクシー会社との取組を0.5層、1層、2層での連動した協議体として重ねていくことで、区域を超えた多様な効果をもたらす事業展開になると考えます。

3区での具体的な検討や取組が前例となり、地域の特性に合わせた他地域での広がりを期待しています。

誰でも気軽に立ち寄れる 「お散歩カフェ」

～散歩の途中で立ち寄れる
身近な地域の居場所づくり～

散歩の範囲で気軽に立ち寄り、休憩や交流ができる集いの場に「お散歩カフェ」と名付け、地域の集いの場づくりを進めています。区社協からの事業実施の呼びかけに応じてくれた地域住民や団体等が主体的に取り組んでいます。



緑区社協
松本 賢剛

取組のきっかけ

生活支援 Co の課題認識として、困りごとを抱えた人が直接相談窓口に出向いたり、見知らぬ人に相談することはハードルが高いと感じていました。その結果、包括や区役所などの個別支援の専門職からは「重篤化してからの相談も多く、早期に生活課題を話せる場があれば、解決できることもあるのではないか」という声も聞いていました。その解決方法の一つとして、身近な場所で馴染みの関係を構築していくことが必要なのではないかと考えていました。

そこで、令和元年度から「縁側のような気軽な場を利用して、顔を合わせることから始める近所づきあい」というコンセプトで、地域の居場所づくりの検討を区社協内で始めました。検討を始めるにあたり、居場所を通じて住民同士で気楽に話ができる雰囲気と関係性を作ることを目指すため、次のような特徴を持った場づくりを心掛けました。

- ①買い物や散歩の途中で靴を脱がずに立ち寄れ、ちょっと休憩できる場所として、住民にとって身近な居場所になっている。
- ②もてなし役がいることで、立ち寄りやすく、休憩している人たち同士の交流が促されている。
- ③通りがかりに休憩したり、食べ物や飲み物を持ち寄っておしゃべりしたり、自由に過ごす憩いと交流の場として活用されている。

また、活動に統一感を持たせるために「お散歩カフェ」と名付け、目印としてオリジナルデザインの共通「のぼり」を作成しました。偶然同時期に、長津田地区の県営団地内サロンの打合せの場で、集会所の空いている時を

活用して常設の集いの場ができないかという話しが出ました。「お散歩カフェ」構想を伝えてみると、とにかくスタートしてみようということになり、令和元年6月にお散歩カフェ「ふらっと」が始まりました。その後も、区社協広報紙への記事掲載や、地域に出向いた先での説明、地域活動に携わる人材発掘・育成を目的とした区民向け講座で紹介するなど、周知を進めていきました。

1層Coの思い／

まずは通りかかる人の目を引き、気づいてもらいやすくするための、お店という看板のような目印として「共通オリジナルのぼり」を作りました。のぼりとセットでお散歩カフェを周知することで、安心して運営に取り組めたり地域の方が立ち寄れるのではないかと考えました。開始にあたっての条件は特になく、十分な話し合いを重ねて目的に賛同していただけるよう趣旨をお伝えしています。運営側の主体性を損なわずに自由な発想でそれぞれ取り組んでいただいています。

Comment



中山駅南口徒歩3分の介護事業所敷地横で、晴天日は椅子を並べて、お散歩カフェを日々開催しています。通りすがりの方に気軽にご利用いただき、事業所スタッフも時々座って、雑談タイムを楽しんでいます。

お散歩カフェ「輪和話」運営者
介護事業所あゆみ 施設長 本望 小千江 氏

取組の内容

その後も、区社協からの働きかけ、区民向け講座への参加、もてなし役とのつながりなどがきっかけで、下記のカフェが次々と立ち上がりました。

- 「絵のあるスポット『みどり』」…自宅の庭が会場。家の壁の大きな絵が印象的。
- 「Good☆Day (グッデイ)」…自宅のウッドデッキが会場。晴天時には富士山が見える。
- 「輪和話 (わわわ)」…介護サービスの事業所が会場。近所の高齢者が事業所前で休憩しているのを目にしたことがきっかけ。
- 「YURURI (ゆるり)」…自宅で行うガレージセールと併せて実施。閑静な住宅街の一角。

近隣の小学生が下校の途中で立ち寄ったり、犬を通じて知り合った仲間で談笑したりと、様々な世代が交流しています。

令和2年2月には、5か所のもてなし役の皆さんが集まり、共通する課題の解決や今後の発展について検討することを目的に「お散歩カフェサミット」を開催しました。もてなし役からは「新しい友人がたくさんできた」「いろいろな人が来て話すのは楽しいので、日記代わりにメモを残している」「もてなし役同士が互いのカフェを行き来している」など、自身のやりがいや人間関係の広がり、参加者との会話からニーズ発掘につながっている様子が聞かれました。コロナ禍では、今まで室内で行っていたサロン活動を屋外に移し、感染対策を講じた6か所目のお散歩カフェ「たすけあい・ゆりの木」がオープンしました。

Comment



お散歩カフェ「Good☆Day」木村さんご夫婦

新治市民の森に隣接した立地にあり、ウッドデッキを開放して、休憩所や近隣の地域活動の紹介などに活用できればと始めました。セントバーナードと秋田犬を飼っているの、ちょっと珍しい大型犬とのふれ合いも自慢です。



お散歩カフェ MAP

1層Coの思い／

開催の要件を細かく設けず、生活の延長線上で出来るような気楽さをアピールしたことが功を奏し、これだけ多様な居場所が広がったのではないかと思います。地域の人にとっては身近な居場所として活用され、もてなし役にとっては気楽に取り組める活動になるなど、双方のメリットを生かせるような後方支援をしていきたいと思っています。これらの異なる主体の居場所がこれから先どんな風に発展していくかが楽しみです。

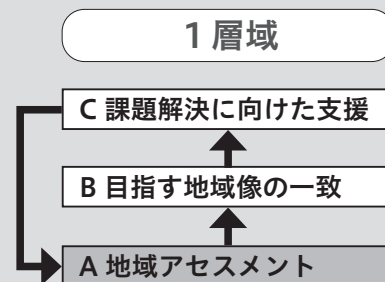
今後に向けて

1か所目が始まって1年以上が経過し、徐々にお散歩カフェの存在が認知されてきました。常連で参加している人も増え、もてなし役と参加者とのつながりもできています。会話の中から生活のちょっとした困りごとを頼めるような関係性が生まれたところもありました。地域の馴染みの関係性を作っていくためには、通りがかりにのぼりに気づいた人に「ちょっと寄って行って」と声をかけたり、休憩している人にさりげなく声をかけてみたりする人が必要です。今後も、その役をお願いできる人や団体を増やしていきたいと思っています。もてなし役のみなさんは日頃から参加者を気かけ、変化をキャッチする力を持っています。今後は、そこで得られた気づきを生かして、潜在的なニーズ把握へとつなげていけるよう、2層Coや区社協地区担当と共に取り組んでいきたいです。

「地域状況把握シート」で 地域の“今”を知ろう！

～これからの活動方針をCPと考えていくために～

コロナ禍で地域活動の休止等により住民の様子が見えづらくなったため、まずはCPとともに地域状況の把握から始めました。区社協が「地域状況把握シート」を作り、それぞれのCo連絡会にて情報収集を呼びかけ、現状を見える化して地域へ発信しました。



神奈川区社協
宇田 梨々花

取組のきっかけ

神奈川区では、2層Coと地域交流Coが連携して地域支援をしていくことを目的に、以前より区社協の担当者が情報共有や相談をしながら連携して合同研修会や会議を行っています。

令和2年3～5月にかけて新型コロナウイルス感染拡大の影響で地域活動が休止となり、区社協も地域に向く機会を失い、地域の状況がつかめていない状態が続いていました。再開された2層Co連絡会・地域交流Co連絡会の場では、集まることが難しい状況の中でどのように支援をしていけば良いのかを懸念する声が挙がっていました。

また、地区社協や地区民児協等の地域の会議が再開され始めると、「これまで気にかけてきた人たちがどうしているか心配だが何も動きが取れない」という不安の声が聞かれました。

今まで関わってきた活動や人の様子が見えなくなってしまった為、専門職と地域の担い手が共に、もう一度地域の状況を捉え直すことから始めることが必要だと考えました。そこで区社協内で話し合い、①課題やニーズを改めて捉え直す、②関係機関とともに地域アプローチを見直す、③活動団体とともに活動目的の再確認を行う、④住民の主体性に基づきこれからの活動を共に考えていくという、4つの段階を踏まえた支援方針を決めました。

この方針をもとに、まずは①、②に取り組むために、区社協で「地域状況把握シート（以下、シート）」という様式を作り、2層Coと地域交流Coに作成を依頼することにしました。シートの項目は、サロン・見守り・地区ボラセンなどの活動状況、活動者の意向とその理由、困

りごとの変化・包括への相談状況、社会資源の変化などとし、地域に関する情報を集約し、書き起こしてもらうものとししました。作成する際には、2職種のCoだけでなく包括3職種とも話し合い、CPの持つ個別支援・地域支援両方の視点で多角的に地域状況を把握してもらうよう依頼しました。

1層Coの思い／

5月に緊急事態宣言が明けると、CPは地域の声を受け、再開に向けた働きかけをしている様子も伺えました。区社協としては足早に戻すのではなく、まずは見えづらくなっている地域の様子を把握することから始め、そのうえで「今の地域にあった支援を考える」ことが必要だと考えました。このシートを各CPに作成してもらうことをきっかけに、地域に連絡を取ることで、会えない状況下でもつながりを保つ機会にもなると考えました。



2層Co連絡会の様子

取組の内容

集まったシートの内容の中には、サロン・食事は検討中・休止中が多い、再開して万が一参加者が感染してしまったらという不安を感じている、どういう対策を取れば開催できるのか分からない、など地域の声が集まりました。また、包括への介護保険の相談件数が増加傾向にある、リモート会議に関心がある地区がある等、今までとは違う地域の状況が見えてきました。

そこで、支援方針②を進めるため、2層Co連絡会・地域交流Co連絡会で、把握した地域状況を生かしてどのように地域へアプローチしていくか検討を行いました。

その後支援方針③・④を進めるため、CPの中には今回把握した地域状況を資料にまとめ、地区社協や地区民児協での会議の場で紹介し、見えづらくなっている地域の困りごとを話し合うために活用したところもありました。またある地区では、地区のすべてのイベントが中止となり、住民が定例会議で集まっても議題がなく15分で終了してしまうような状況でした。せっかく話し合う場があるのにこれではもったいないと、2層Coがシートの項目に従い今の地域の姿を話し合うことを提案しました。その話し合いの中で、この地区で毎年開催されるお祭りのきっかけは、「子どもたちの遊ぶ場が少なくお互いの顔が見えない等の地区の課題解決をしたかった」という、当時の役員たちの想いだったことが共有されました。当時その場にいなかった現メンバーにも想いが伝承され、結束力の高まりにつながるなどの波及効果が見られました。

1層Coの思い

地域支援に携わる私たちは、地域が動き出すのをただ待つのではなく、必要なタイミングを見計らい、専門性に基づいた情報提供をしていくことが必要だと思っています。Coが把握した他地区の地域活動状況や包括が把握している生活課題など、専門職だからこそ把握できる情報を伝えることで、住民のみなさんが進むべき方向性を主体的に考えられるよう心がけました。活動が停滞する中で、会議の話題がイベントの運営や手法の検討から、今までの活動が地域課題の解決に結び付いていたのかなど、活動そのものの意義について検討する場へと変化する場面もありました。その際もシートで集約した情報が役に立ちました。

Comment



地域活動の停止やコロナ禍で生まれる新たな個別相談に対して、何をしていたら良いかを考えた時に、地域支援と個別支援の両方の専門職がいるCPの存在はとても頼もしかったです。CP内でそれぞれの職種・立場で持ちうる情報を共有し合うことで、総合力を生かした地域支援につなげられるよう、区社協からの働きかけを心掛けました。

神奈川県区社協 宮地 悠希

地域の状況把握

① サロン、見守り、地区ボラセンなどの活動状況	
サロン 見守り 地区ボラセン	
② 活動者の意向とその理由	
地区民児協 連合 地区社協	
③ 困りごとの変化	
包括への相談内容 民生さんが見守っているケース	
④ 社会資源の変化（場所、人、お金）	
（場所）ケアプラザ、地区センター、自治会館、個人宅 等 （人）民生委員児童委員、ボランティアさん 等 （お金）区社協からの助成金、区からの補助金 等	
⑤ その他	

各CPに入力依頼をした地域状況把握シート

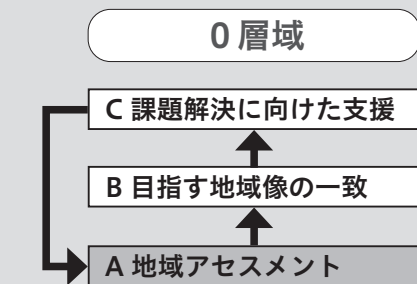
今後に向けて

令和3年1月に2度目の緊急事態宣言が出され、活動に対してさらに不安を感じている方々が多くいます。感染に対する考え方は個人や地区によりさまざま、地域へのアプローチも今まで以上に臨機応変に対応することが求められています。そのためにも的確な情報収集と提供が重要だと感じています。感染対策を図りながら、地域活動を再開しつつながり続けるための工夫をしている地区もあり、これら各地区の情報を集約できることは、CPや区社協の強みです。住民の不安な気持ちをきちんと受け止めつつ、集めた地域情報等を活用しながら、引き続きCPと協力し、つながりを絶やさないための働きかけを粘り強く続けていきたいと思っています。

1層Co連絡会を活用した 課題解決や スキルアップに向けて

～区域を超えた展開を目指して～

1層Coの動きや事業推進の壁を共有し、日ごろの取組に活かしていくことを目指し、1層Co連絡会を開催しています。区域で解決が難しい課題の整理や、地域性に左右されない1層Coが共通して持つ視点などについて検討を重ねることで、解決に向けた様々な取組につなげています。



横浜市社協
地域福祉課
大久保 敦子(左)
藤盛 智子(右)

取組のきっかけ

1層Co連絡会は、事業スタート当初から定期的に開催をしており、各区の取組について情報共有や意見交換を行ってきました。連絡会の後半では3つのグループに分かれ、その年に必要とされているテーマを設定し、検討を行っています。

今年度のテーマを決める際、「1層Coだからこそできる、事業推進に共通する視点を明らかにし、切磋琢磨する場にしたい」「区域では解決できない共通課題を明らかにし、解決に向けて取り組みたい」といった意見が聞かれました。

平成28年度から事業が始まり、今まで1層Co18人がそれぞれの手法で地域支援や2層Co支援をしてきました。連絡会の中でも、事業や取組の共有はしていましたが、そこに至るまでのプロセスの検証までは時間が足りずできていませんでした。1層Coは人数が少ないためモデルとなる先行事例が少なく、また2層域の活動支援が主な業務となり、事業の実施主体になることが少ないため、立場を生かした動きが見えづらいなど、1層Coらしさとは何かを不安視する声も聞かれました。

そこで今年度は、1層Coが持つべき視点や、価値・理念等を共有し、地域特性が違っていても、属人的にならない地域支援の共通認識の醸成やスキルアップにつなげることを目標にし、「1層Co事例研究班」を作りました。

また、取組が広がっていく中で、1層域では解決が困難な市域での制度上の課題や新規の事業開拓等を通じて、共通して持つべき知識も増えていきました。横浜市というスケールメリットを生かし、課題解決に向けて取り組むべき事柄を考える「市域課題の共有班」を作りました。

上記の2つのグループに、昨年度から継続して取り組んでいる「1層Co活動事例集作成班」を加えた3班で、

検討を進めることになりました。

しかし、年度当初、新型コロナウイルス感染拡大の影響で地域活動が休止・停滞している今だからこそ1層Co同士で、何をすべきかを話し合うことの必要性が高まりました。

市社協職員の思い／

1層Coが普段行っている業務は多岐に渡るため、新しく1層Coになった職員は、何を抛り所に仕事をすればいいのか、何を持って自分の仕事を評価してよいか目標設定に迷いがあるとの声を聞いていました。連絡会をそういった悩みの解消や、市域だからこそ出来ることを提案する場として活用したいと感じていたため、新たなテーマで1層Coのみなさんと課題解決に向けてチャレンジ出来ることを楽しみにしていました。



1層Co連絡会の様子

取組の内容

連絡会前半の情報共有では、コロナ禍での地域支援の状況を共有し、これまでの活動目的を再確認することの必要性などを確認しました。また、昨年度の取組共有をする中で、移動販売の取組を進めている複数の1層Coから、高齢者世帯等が多い市営住宅敷地内の駐車場等で移動販売ができないかといったニーズが挙げられていました。3区がモデル的に実施することとなり、進捗状況等を報告する中で、横断的な取組となるよう実施する上でのポイントや留意点等を情報共有しました。

「1層Co事例研究班」では、架空事例を用いての事例研究や、2層Co支援の実施状況の共有を行いました。地域づくりを行う上で2層Coへの働きかけなど、共通して押さえておくべきポイントの確認を行いました。

「市域課題の共有班」では、班のメンバーそれぞれが抱えている課題を共有した結果、今年度は「空き家の地域活用支援」をテーマにしました。取組数が市内でまだ数少ない中、事務手続きにあたり把握すべき法律・制度が多岐に渡り、確認事項も多いため、経験の無い生活支援Coは対応に苦慮していました。相談対応を円滑にすることを目的に、情報整理をした資料を作成しました。

「1層Co活動事例集作成班」では、本事例集の企画、構成を行いました。お互いの事例の校正に携わる中で、事例の背景にある1層Coとしての「意図・思い」を知り、言語化していくプロセスが自己研鑽の機会につながりました。



班に分かれて話し合い



市域課題の解決に向けた整理

市社協職員の思い

コロナ禍で地域活動を進めることが難しい状況の中で、連絡会を通じて意見交換をすることで、どんな状況に於いても地域活動が大切であることを確認することができ、原点に返ることができました。

班の新しいテーマについては手探り状態でスタートしたため、迷いながら進めましたが、18人それぞれが持っている知識や経験を市域全体に還元することや、悩みを一緒に解決に導いていけるような土台作りの年に出来たのではないかと思います。

Comment



高齢者等への買物困難者への取組として、移動販売の取組が各区で展開されていますが、これまで制度上困難だった市営住宅の駐車場等での販売について、関係局と検討を重ねるとともに、モデル区による試行実施から様々な検証を行い、制度の見直しに至ることができました。

移動販売は単に買物支援にとどまらず、外出支援、地域での見守り及び社会参加等が実現できる地域コミュニティ醸成の場としても期待できる取組です。引き続き、市域での課題抽出や情報交換を行いながら、多様な主体と連携して資源の充実や創出に向けた取組を推進し、コロナ禍においても地域活動の歩みが止まることのないよう一丸となって取り組んでいきます。

横浜市健康福祉局地域包括ケア推進課

係長 小山 直博 氏(左)、職員 岡部 雅美 氏(右)

今後に向けて

次年度も引き続き、定期的な情報共有と、スキルアップや市域ならではの課題提起の場として、連絡会の活用を考えています。

各班の動きとしては、事例研究を通じ、1層Coの日々の動きやその背景にある想いを棚卸ししながら、横浜市の1層Coらしさを明らかにできる方法を全体で考えていきたいと思います。また本事例集の作成を通じ、見えづらい1層Coの動きを可視化していくことで、関係機関に1層Coの役割を伝え体制整備事業の推進力をあげていくことを目指します。

また、区内で解決できない課題を洗い出し、複数区での検討が必要なことについて明らかにしながら、必要に応じて考え方や方向性を整理し提言などにつなげていきたいと思います。

1 層域

C 課題解決に向けた支援

今後に向けたオンライン活用の取組

～生活支援Co同士で取り組むスキルアップ～

鶴見区社協 河野 由香里

コロナ禍で、生活支援Coは地域支援の在り方についてそれぞれが悩んでいました。そのため2層Co連絡会で、活動再開に向けての課題や地域支援の工夫について重点的に情報交換を行いました。その中で「オンラインの活用」について意見交換したところ、今後に向けて地域への情報提供の必要性を感じているものの、その経験値や利用状況は様々であることが分かりました。そこで、まずは生活支援Co自身が体験するための場を持つことになりました。経験のある2層Co3人が中心となって「Zoomを活用したWeb会議体験会」を企画し、当日の講師と参加者のサポート役を務め、1層Coは連絡調整などの全体調整を行いました。この体験会を通じて、オンライン活用により、会場まで出向



2層CoによるWeb会議の概要説明

きにくい方の参加促進や、拠点間をつないだ団体同士の情報共有の支援など、生活支援Coとして関わる様々な地域支援のイメージづくりを行うことができました。また、2層Co同士で知識やスキルを伝達し、お互いに学び合える良い機会になるとともに、横のつながりづくりにもなりました。

1層Coの思い／

今年度、複数の2層Coが交代し、私自身1層Coとして着任したばかりだったこともあり、このような状況だからこそ、より一層相談しあえる横のつながりが必要だと感じていました。今回の取組は、Zoom経験のある2層Coの企画を基に実現しました。今後も様々な課題を集約し、お互いの強みを生かして、解決に向けて一緒に取り組んでいきたいと思っています。

1 層域

B 目指す地域像の一致

身近な地域の取組紹介を通した体制整備事業の啓発

～地域での新たな取組を生み出すきっかけづくり～

西区社協 工藤 さとみ

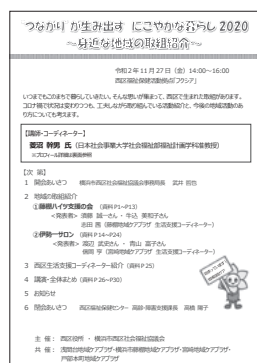
体制整備事業の理解・啓発に向け、『“つながり”が生み出すにこやかな暮らし～身近な地域の取組紹介2020～』を開催しました。「居場所」「生活支援」の取組を進める2団体の発表を通して、新たな取組が生まれるきっかけづくりとすると、特に自治会エリア程度の小さな取組に焦点をあて、新型コロナウイルス感染症の関係でこれからの地域活動をどうするか考えることもテーマに盛り込みました。

発表事例は、コロナ禍でも住民同士のつながりを絶やさないために、いち早く体

操教室の再開に向けて対策を検討した「伊勢一サロン」の取組と、ちょっとした困りごとを支えあうしくみが西区において初めて立ち上がった「藤棚ハイツ支援の会」の取組とし、今後の地域での広がりを目指しました。

事前に発表団体や講師との打合せ等を十分重ねてきたことで、当日は目的と合致した内容となりました。

成果としては、発表団体が自分たちの取組を振り返る機会となり、周囲から感想をもらうことで今後の活動への自信や励みにつながったことが挙げられます。次年度以降も開催目的を大切にしながら取組を続けていきたいと思っています。



活動発表会のチラシ

1層Coの思い／

本事業の開催目的や目指すところを2層Coや区と企画段階から共有することを大切にして進めてきました。また、発表団体や講師と打合せをすることで、2層Coが担当する地域との関わりを俯瞰し、「次年度発表する地域資源を生み出していこう!」という意欲にもつながればよいという思いもありました。今後も皆で連携し同じ方向を見ながら地域のつながりづくりを進めていきたいと思っています。

1 層域

B 目指す地域像の一致

コロナ禍の今こそ、地域に寄り添う生活支援Coの役割とは!?

～生活支援Co同士の協議・意見交換から～

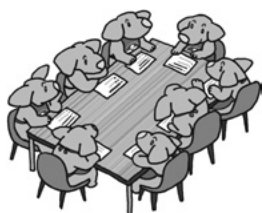
南区社協 葛城 洋子

コロナ禍で地域活動が停滞し、思うように地域へのアプローチができない日々が続く中で、地域活動のあり方とその支援を再考する機会として1層Co・2層Coだけの話し合いの場を持つことにしました。その中で集まらなくてもつながりを絶やさないために今できることは何か、意見交換を行いました。

その中で2層Coから、サロン活動団体に活動再開の是非を問われたり、これを機に解散を検討している会から相談を受けた、といった声も出ました。そこで、地域にしっかりと寄り添えるよう、地域支援の方向性をまとめて全ての2層Coと共有しました。

また、「今だからこそ住民に地域の支え合いの必要性を理解してもらい、生活支援Coにもっと気軽に相談してもらえるようにしたい。」といった意見も出ました。これに共感した1層Coと有志の2層Coが集まり、継続して話し合うことにしました。今まで、個々の生活支援Coが日頃感じている課題や想いをじっくり共有する時間があまり取れな

かったので、貴重な話し合いの機会となっています。紹介パンフレット等の紙媒体での啓発や、他区で実施している見守りキーホルダー制度の導入、ふだんの関わりの中でできそうなことなど、2層Coの自発的なアイデアを活かしながら実現に向けた検討を進めています。



1層Coの思い/

コロナ禍では、誰でも不安を感じ孤立していく可能性がある中、まずは今まで熱心に地域活動の中心となって地域を支え続けてくださった担い手の皆さんや利用者に会いに行き、話を聞こうと（会えない場合は電話やメールで）2層Coへ伝えました。大切に培ってきたつながりを絶やさないために、関わり続けることが大切だと感じています。

0.5 層域

C 課題解決に向けた支援

団地・集合住宅支援から考える住民のエンパワメント

～多様な主体と連携した支援を考える～

保土ヶ谷区社協 稲田 恵子・旭区社協 梅木 博志
泉区社協 田村 敦子・瀬谷区社協 丸山 敦子

県営・市営住宅団地は築年数50年超えも多く、今後更なる課題の拡大・深刻化が想定されます。前年度は、4区合同で団地支援の困りごとの共有、解決のヒントを探る「情報交換会」を開催し、団地特有課題を整理し各層で取り組むべきことを明確化しました。

今年度は、団地の課題解決のため“生活支援Coが住民をエンパワメントする働きかけを学ぶ”研修を、4区と市社協とで企画し市域研修として実施しました。

研修では、全社協元常務理事の渋谷篤男氏の講義のほか、市営住宅のライフサポートアドバイザーやURの生活支援アドバイザーと、生活支援Coとが連携した取組について学びました。グループワークでは、自分の担当している団地の課題解決に向けて、「個別支援」「地域づくり」「つながりづくり」の連動を意識しながら住民をどうエンパワメントしていくか、ディスカッションを行いました。

団地特有の課題はありますが、住民だからこそ見える視点や地域の想いを引き出しつつ、住民と一緒に地域課題解決に向けて取り組むという支援のあり方は、団地に限らず普遍的なものであることを確認しました。



研修当日の様子

1層Coの思い/

研修での意見交換の中で、団地・集合住宅の課題が同じでも地域性や住民力が違えば解決方法も違い、マニュアルはないことを再認識しました。団地内に支援者が配置されても住民による見守りや助け合いの機能が失われないような配慮が必要です。住民をエンパワメントしながら団地の課題解決が図れるよう、福祉と住宅施策の所管部署との連携を深める必要があると感じています。

SNSを活用した地域の情報発信の促進

～新たな地域のつながりづくりを目指して～

金沢区社協 長谷川 広貴

コロナ禍において、地域におけるICT活用へのニーズが高まっています。区社協主催の地区社協事務局長会議の場でも、外出自粛で社会的に孤立する人が増えるのではと不安視する声や、回覧板が回せず情報発信ツールを失ったことなどが共有され、新たな情報発信について検討する必要があると感じました。

そこで、「現在の情報発信は地域に届いていたか」を振り返り、気軽・簡単に情報が発信できるSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）に着目し、新たなツールとして活用を検討する機会を作ろうと考えました。まずは区社協の一番身近なパートナーである地区社協向けに「SNS活用研修」を企画したところ、研修には計43名の地域住民にご参加いただき、SNS活用の目的や、特徴、活用術を学びました。これをきっかけに、ある地区では実際に活用に向けた検討が始まりました。



実際の講座の様子

検討メンバーにはSNSへの不安や迷いを感じる方もいて、イメージを掴んでもらうために他地区ですでに始まっているSNS情報を提供しました。さらに、新たな活動者の発掘、地元の施設や企業など多様な主体と繋がる可能性など、SNSの活用効果についても共有しています。

1層Coの思い／

どんなに良い活動をしていてもそれを知る人が少なければ意味がありません。コロナ禍だからこそ、今までのやり方に捉われず新たな手法として、SNSを積極的に活用してもらいたいと考えました。

地域活動の情報を集約している地区社協が、継続的に鮮度の高い情報を発信していくことで、必要な人に必要な情報が届くよう、新たなつながり方を今後も地域の皆さんと模索していきたいと思います。

With コロナでのセカンドライフ講演会

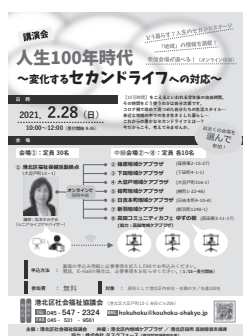
～区社協とCP／地域の居場所を結んで～

港北区社協 渡辺 麻希

港北区はこの先も人口増加が続き、地域活動等での活躍が期待できるシニア層も増えていく傾向にあります。このような背景の中、昨年度3月実施の予定で区域の講演会「人生100年時代～変化するセカンドライフへの対応～」を企画しました。広域で周知・集客し「総論」という位置づけで実施した後に、区内CPで計画する次年度の具体的な取組（セカンドライフ事業等）につなげる流れもできていました。しかし新型コロナウイルス感染拡大の影響でやむなく中止に。

今年度に入ると、地域でも徐々にオンラインを活用した取組が意識されるようになり

ました。その中でCP（2層Co、地域交流Co）とも相談し、オンラインを取り入れた同企画の実施を決めました。メイン会場を区社協に、そこでの講演の様子をリアルタイムで複数のサテライト会場（区内CPや空き家を活用した地域の居場所等）に同時配信。1か所での密を防ぐことに加え、参加者にとって身近な場所で受講してもらい、2層Coとつながってその後の活動に結ぶ機会になればとの期待もあります。当日はIT活用を地域向けに発信する区内の横浜型地域貢献企業にも応援を依頼しました。



講演会チラシ

1層Coの思い／

地域のみなさんとの会話の中でも「オンライン」というキーワードがよく出てくるようになりました。もちろんそれは万能薬にはなりませんが「新しい生活様式」の中での工夫のひとつ。とはいっても実は生活支援Coの多くは未経験?!何が便利で、どこにつまずくのか…まずは自分たちでやってみなくては。区社協と2層Coと、トライ＆エラーを繰り返しながら、体験を積み重ねています。

1 層域

A 地域アセスメント

地域活動情報のWeb公開とCMとの交流会

インフォーマルサービスの活用に向けて

都筑区社協 杉崎 雅代

都筑区では、生活支援Coと地域交流Coの合同連絡会を月1回行っています。平成28年度からこの連絡会と区の主任CM連絡会と共催で、区内CMとの交流会を年1回実施していますが、今年度は区内の地域活動情報をWeb上（Ayamu）で公開するタイミングとちょうど重なりました。アクセスしやすい情報手段をケアマネジメントに生かしてもらうためにもこの交流会を有効活用したいと考え、次の3つを目標にして企画を考えていきました。

①CMに介護保険外の社会資源にも目を向けてもらう②両Coが個別ニーズを知り地域に必要な居場所や活動の検討につなげる③双方の強みを生かして課題解決を具体的に組み立てる関係づくりを進める。

打ち合わせの際には地域交流Coから、インフォーマルな地域活動が心豊かな暮らしを支えている事例を紹介したい等のアイデアがあがりました。幹事CPの担当職員が異動や入職まもないこともあり、今までの経緯や交流会の狙いを毎回丁寧に確認し、目的がぶれないようにしています。新型コロナウイルス感染拡大によりWeb公開と交流会実施は延期となりましたが、次年度開催に向け準備を進めています。

1層Coの思い／

コロナ禍ではじまった新年度。2層Coは地域に向くことや地域活動継続の難しさに直面してきました。このような環境でもできることを模索し、地域活動情報のWeb公開とCM交流会に向けた準備を進めてきました。生活支援Coと地域交流Coが結束し専門職との関係を強化することで地域支援の推進へつなげていけるように、引き続き検討を続けていきたいと思っています。

1 層域

B 目指す地域像の一致

お互いが見える、話せる、だから一緒に取り組める！

～今求められるCPと区社協の連携について～

青葉区社協 野々村 まなみ

1層Coとして着任した令和2年4月は、コロナ禍の影響で例年と様変わりした環境でのスタートとなりました。地域だけでなく各CPに出向く事も出来ない状況でしたが、同じく2層Coも生活支援Coとして今何をするべきかという悩みを抱えながら、自分たちにできることを模索する日々が続きました。

そのような状況で、青葉区では4月から市内でいち早くオンラインによる生活支援Co連絡会を開催し、直接話し合いができる機会を大切にしました。また、7月からは、ヒアリングを通して2層Co一人ひとりに向き合い、これまでの経験や取組、仕事に対する思い等を把握しました。その結果、地域支援の取組に悩みながらも、相談できる専門職が少ない2層Coが多いということがわかりました。そこで、新任の2層Coを対象に、先輩の2層Coからの体験談を聞いたり、基本的な制度概要を学んだりする勉強会を毎月開催しました。また、区社協内では



青葉区生活支援Co連絡会メンバー

各地区担当による情報共有の場を定期的に設けて、各地域の課題や体制整備事業の動きなどを共有し、CPと区社協と一緒に考えて取り組めるよう体制をつくりました。

1層Coの思い／

1層Coとして着任早々、コロナ禍の影響で2層Co全員と会う事が出来ず戸惑いでしたが、このような状況だからこそ、地域を応援するCPと区社協がこれまで以上に情報を共有し、手を組んで取り組む必要があると感じました。今後もCPと区社協の情報共有を大切にし、一緒に地域の活動を応援していきたいと思っています。



第1層生活支援コーディネーター活動事例集

発行月 令和3年3月

発行 社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会

〒231-8482

神奈川県横浜市中区桜木町1-1

横浜市健康福祉総合センター 8階

(地域活動部 地域福祉課)

TEL : 045-201-8616 FAX : 045-201-1620

<http://www.yokohamashakyo.jp>



ほら、
よこはまは
あったかい

※この事例集は、横浜市健康福祉局地域包括ケア推進課の委託契約に基づき作成しています。